

[05_04]九州大学大型計算機センター広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1468006>

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 5 (4), 1972-09-05. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：

あ る 統 計

山口大学電子計算機室室長 鈴 岡 俊 郎

ある会合の話のタネにでもと思って、本年3月統計数理研究所から発表された「研究教育機関における電子計算機利用の実態調査と需用予測」のための第2回調査結果から、ある種の統計を引きだすことを試みた。これはそのアンケートの最後に今後のコンピューターやそのシステムに望む自由意見を書く欄があり、その要約（と思われる）がもれなく（と思われる）収録されており、その傾向が参考になりはしないかと思つたからである。

この調査は昨年11月に全国75国立大学の教官から抽出された3,000名を対象とし、そのうちの1,050名から寄せられた回答に基づいている。コンピューターを「役に立つもの」、「便利なもの」と認めるものが80%を越え、しかし「好き」と答えたものが39%（「嫌い」なもの3.3%）という人びとの意見である。71ページにわたるその収録は利用者の意見と非利用者の意見に分れていて、私自身は非利用者に属する。（10年前ある大学の“当時の”大型が無料のテストランニングを行なっているときに3回ほど計算を依頼したことがあるに過ぎない。）意見の約70%を私が勝手に設定した項目のいずれかに分類した。その数は利用者から329、非利用者から239であった（数字は人数でなく意見の数である）。上記報告書の食傷するほどの数字の羅列に対して、ここでは印象的な記述にとどめよう。そのために私の主目的であった専門分野別の集計の結果には触れないことにする。

最も多い意見は言語に関するもので全体の23%はこれに向けられている。中でもその6割以上がプログラミングに対して「手書きの文字からinput」「パターン認識」「数式をそのまま読み込め」、「言語を人間に近づけよ」「もっと自由なプログラムを」と望んでいる。これはそれが単に非常に厄介だからというだけでなく、プログラミングの未来の姿を指向しているものと思われる。声の1割は非利用者である。

つぎは以下に示す3つの項目が共に13%であった。その1は計算機センターに対する要望で、「いつでも相談に乗ってくれるプログラマー」「プログラムの作成はセンターで」というのがその半分以上を占めている。参考までに言えば、報告中の「9. 受けたい助力」の項によると、利用者ですらプログラムの作成を望む者42.4%、カードや紙テープのパンチを望む者37.4%ということである。その2は大型計算機の端末機システムやTSSを望む声で、これこそは異口同音といった感じである。これはたしかに疑いもなく今後の計算機システムのあるべき姿であり、一部ですでに実施されているが、現場からと思われる声はなかったようである。わずかに「待時間が短かければTSSはいらない」「大型と手許の計算機を結ぶチャンネルがあれば必ずしもon lineで結ぶ必要はない」等が注意を引いた。しかしこれはTSSやオンラインシステムがまだ熟し切らない悲しい現実の裏返しではなからうか？その3はハードに対するもので、その中で数から言えば「もっと安価に」というのが最も多い。しかし「故障の少ないものを」「OSが悪い」「OSの統一」「IBMに劣らぬものを」等は国産機を使用する我々の共通の叫びであろう。

これらに続いて、計算機の分布に関する要求が9%を占め、「もっと多くの大型の配置を」「各大学に中型を」というものであるが、「どこにも小型を」というのも切実な要求のようである。

意外だったのは「計算機に支配されるな」であり、これは利用者とは非利用者あるいは属する専門分野の区別なく7%が警告している。国民総背番号を危惧する声もこれに入れた。この「計算機」の文字を「科学」に置きかえれば、科学者の責任が一層明らかになりはしないか。

文献検索や資料のシステム化を望む声（同じく7%）はほとんどが非利用者のものであった。利用者は目の前の計算機利用で頭がいっぱいというところであろうか？ 勿論報告によれば利用者もその95%がこれらを可能と答えているのであるが……（「4. 人間に代ってやれるもの」の項から）。その他、非利用者の意見として、用語や方言などの語彙のシステム化や物資流通の制御などに托した夢が5%あった。

待時間や debug の時間的ロスに対する不満は6%である。しかしこれは氷山の一角と見るべきで、アンケートの「10. どんな不満をおもちですか」の中で「待時間が長すぎる」ことに実に45.1%の人が不満を表面している。自由欄でそれをまた蒸し返したということはそれだけ事態の深刻さを物語っていると見てよいであろう。

最後に、計算料金についてはいずれも「もっと安く」というものであったが、その声は2%に過ぎなかった。予算や定員の増加などの行政面における要求は1%である。

集計を終って、あらためてその中からなんらかの結論を引きだそうとするとき、私のはじめの意図に反して力弱さを感じた。たぶんそれはこの統計が設問に答える形式のデータからのものでないからであろう。待時間を長すぎるという6%の人が、聞いて見れば実は45%の一部に過ぎないと言った具合にである。（これに比べれば報告書の集計はよく読めば実に面白いいろいろな結論を引きだすことができる。）結局私はこの労作を会合で発表せずに終わった。